

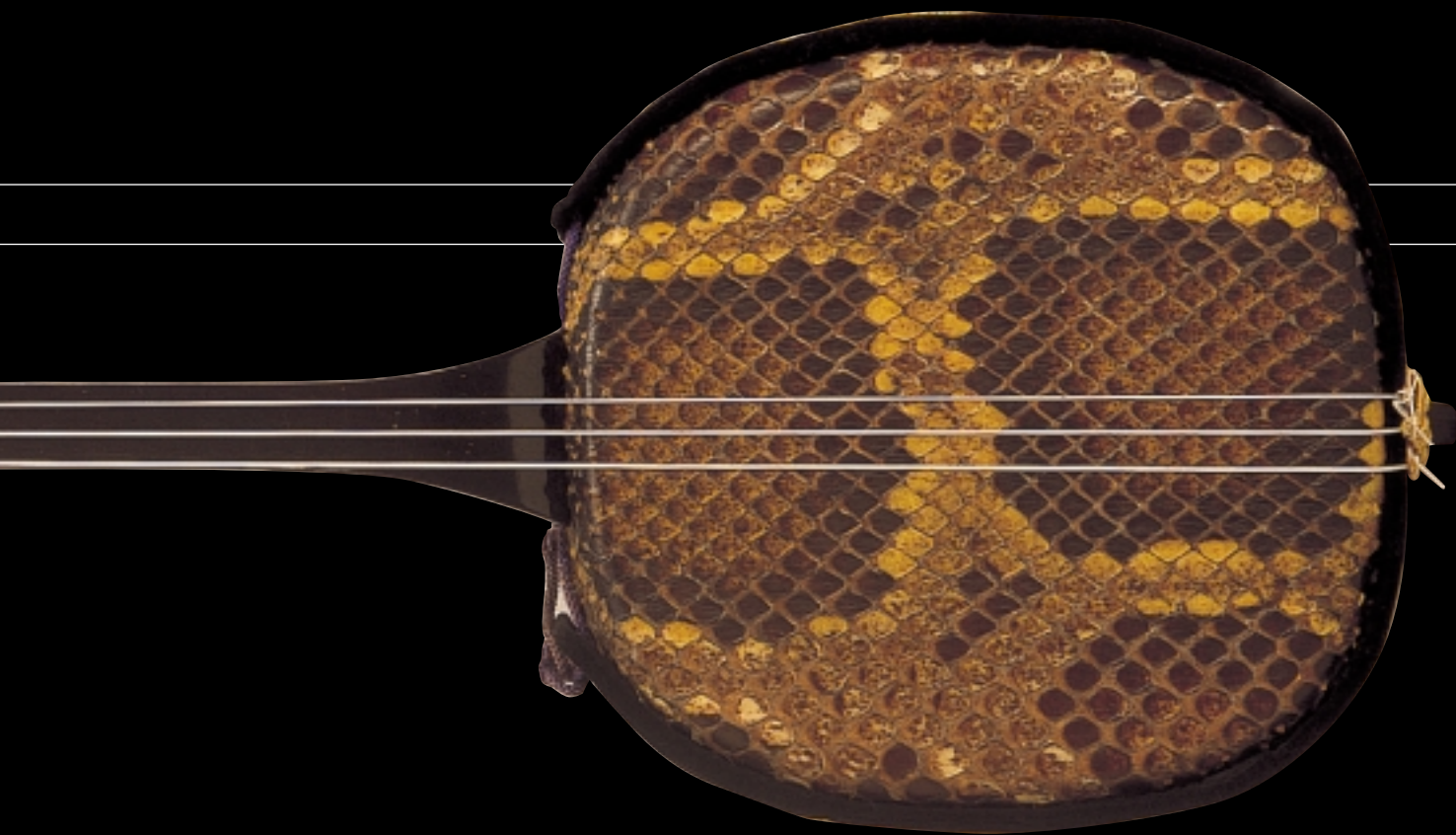
さん しん 三線

第5回

三線は沖縄を代表する伝統楽器です。15～16世紀ごろ中国から伝わった三弦が、改良されて現在の形になったとされています。琉球王朝時代は宮廷楽器として発達し、中国の使者を歓待する宴席などで演奏されました。三線の製作は首里王府の直轄で、南風原や真壁などの名工の作が伝えられています。棹の形などにより、いくつかの型が創案され、18世紀ころには「開鐘」(ケージョー)と名付けられた名器も現れます。

三線の音色は共鳴具である胴部(チーガ)で決まりますが、愛好家の多くは棹(ソー)の美しさに価値を求めます。八重山産の黒檀が最高の材料とされ、皮張りはニシキヘビの皮が使われます。かつて、蛇皮は貴重な輸入品で、年間7丁程度しか作れませんでした。そのため、庶民は渋紙張りの三線を用いていました。

美ら島
まるごと
ミュージアム



さんしんもりしまけーじょー つけたり どう
三線盛嶋開鐘 附 胴

県指定文化財。尚家旧蔵。明け方に鳴る鐘の音が遠くまで響き渡ることから、とくに音色の良い三線は「開鐘」と呼ばれます。盛嶋開鐘は、歴代の国王に愛用され、「開鐘の中の開鐘」「筆頭開鐘」と呼ばれた最高の名器で、芯の裏に格調高い筆致で「盛嶋開鐘」と朱筆されています。棹は真壁型と呼ばれる優美な型で、黒褐色の漆が美しさを一層引き立てています。また、胴の内部には突起状の細工があり、音が共鳴するように工夫されています。1982年(昭和57)、尚裕氏から沖縄県に寄贈されました。

胴部のX線投影比較

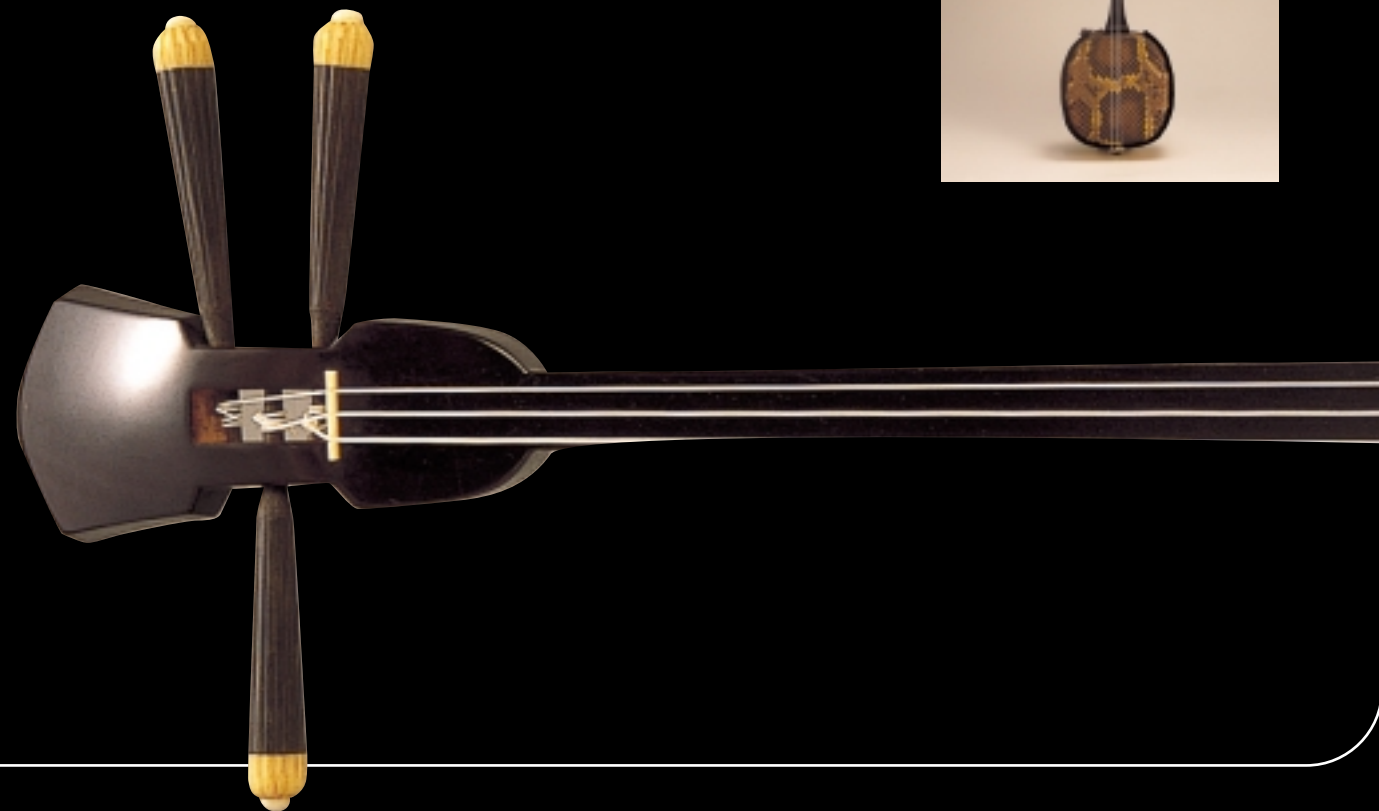
(盛嶋開鐘)



(一般の三線)



※内部に突起が見られる



2007年11月1日
那覇新都心にOPEN!!
沖縄県立博物館・美術館



<http://www-edu.pref.okinawa.jp/kensetsu/>